
今日は何の日??

アザゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日は何の日??

【Nコード】

N7889D

【作者名】

アザゼル

【あらすじ】

なんだか不機嫌そうな彼女。彼女の口から出た言葉は「今日は何の日か覚えているか??」はたして何の日だったのか追伸描写など修正をしました。一度見た人ももう一度みてくれると嬉しいです。

（前書き）

皆さんからもらった指摘を元に修正を加えてみました。

感想よろしいお願いしますm（
—
—
） m

川辺の土手を二人でそろって歩いている一組の男女。

うつむきながら歩いている左目に眼帯を着けている少女

その少女に必死に声をかけている少年

どうやらケンカのような

さてさてこれからどうなるか見物だね

「……………」

無言で顔を下に向けながら歩く彼女。

「なあゝ」

ずっとその隣で一緒に歩いている俺なのだが…

「何??」

と返事を返してくれるものの上の空といった感じでにさつきから生返事ばかり…………なぜ?

「なんか怒ってんのか?」

と下を向いている彼女の顔を覗きこみ表情を確認しようとする俺

「なんで??」

と覗き込んだ顔をそむける彼女。

少し顔が赤かったような気が…

「いや、別に…」

「なら余計なことを聞くな」

と俺を置いて早歩きでスタスタと歩く彼女。

(うーんなんだろうなあ)

と腕を組み考えてみるのだが…

(やっぱり何もした覚えはないんだけどな)

いや、覚えていない事自体に問題があるのか?)

正直全く覚えがない…

いつもは彼女にこんなに慎重に接することなんてないのだが今日は少し事情がある。

その事情を知るには少し前にさかのぼらないといけない。

そう、それは今日の学校の帰り道での話だ。今日もおもしろくもな
んともない授業を終えてウキウキ気分で帰ろうとしたところ

俺の元に一本の電話が掛かってきたのだった

電話自体は仲のいい友人からの電話だったのだが内容が少々問題だ
った。

電話の内容はこんな感じだ

「もしもし?」

「おゝお今どこよ?」

「今、学校でたとこだけど…どうした?」

「いや、大したようじゃね〜んだけど…」

お前の彼女のことなんだけどさ〜」

「それがどうかしたか?」

「今、すれ違ったんだよ、チラツとしか見てないからよくわかんなかったけど左目に眼帯してるから間違いないと思う。」

「それで彼女がどうかしたのか?すれ違うぐらい普通あるだろ」

まあ現に学校の帰りはいつも待ち合わせをして帰ってるし……

「いや今日はいつもと様子明らかにがおかしかったんだよ」

「例えば?」

「説明しづらいけど下向いてボソボソ独り言言ったり…背中から黒いオーラが出てたり…」

とにかく変だったんだよ」

「なんだよそれ」

「とりあえず、急いで行ってやったほうがいいんじゃないか？
一緒に帰ってんだろ？」

「まあな…」

「わかった急いで行ってみるよ」

「まあ喧嘩にならんように気を付けろよ」

と不吉な警告を受けた俺は急いで彼女との待ち合わせ場所へと向かったわけだ。

「……………」

「……………」

で今に至る訳だ。

「おい」

と先に歩いている彼女が背中をみせたまま口を開いた。

「ん〜？」

どうした？」

「今日何の日か覚えてるか??」

と何かのなぞかけをしてくる彼女。

(……今日?…何か約束でもしてたかな?…)

「どうだ??」

覚えてるか??」

と少し強めの口調で聞き返してくるが…

「…すまん、覚えてない…」

俺は少し申し訳ないが正直に答えた。

「……そうか…」

と肩をすくめ明らかに残念がっている彼女。

うわ～なにか分からないけど

すっごい悪い事したみたいだ

何とかしないと……

「…あのさ…」

と先に歩く彼女の肩を掴むと…

「……なに…」

とずっと怖い顔をして返してくれる彼女

だからなんで怒ってるんだよ
俺、何か悪いことしたか

「今日どっか遊びに行く約束してたっけ？」

と恐る恐る聞いてみるが……

「本当に覚えてないのか??」

今度は怒っているというより呆れているに近い表情だった。

「そんなに大事な日か？」

「私にとってはどうでもいい日だけど、君にとっては大事な日だ。」

（俺にとって大事な日?）

と答えが浮かばず考え込んでいると……

「鈍いな」

今日は君の誕生日だろう」

と呆れながらため息をつく彼女。

（……誕生日…俺の…!?!）

思い出したか??」

「おう、今思い出した。」

そっか俺の誕生日か〜

で、なんで彼女が怒ってる訳？

「はあ〜

せっかくプレゼントも用意したのに……ボソボソ」

おお〜祝ってくれるつもりだったのか〜

人の気も知らないでとか、なんで自分の誕生日位覚えてないのよとか色々な罵倒が聞こえてくる気がする……
てか聞こえる。

…ごめんなさい、本当に自分の情けなさに涙がでできますよ。
うう〜

ん!?

でも確かプレゼントって…

「マジ!?

プレゼント用意してくれてんの?」

と嬉しさのあまり少し大声で聞いてしまった…我ながらカッコ悪

「いや…そんな喜ぶようなものじゃ……」

と彼女は声がどんどん小さく、顔はリンゴのように真っ赤になって

いた。

ヤバイすっごい可愛い
その顔は反則だって

「ありがとうその気持ちだけでも嬉しいよ。」

と一応、笑顔で返しておく。

「……で…だな…今日の夕食は二人で…しよう…と…」

そこまで言って顔を下に向けてしまった。

もしかして最初に顔そむけたり顔赤かったのって……

これ言うのに緊張してたからとか…

「どうした??

顔がにやけてるぞ」

不思議そうに俺の顔を眺める彼女

ヤバイ、ヤバイ

彼女に指摘されて初めて自分の顔がトテツもないぐらいニヤケていることに気付いた

「いや、なんでもなくて夕食どうする？
どうか食べにでも行くか？」

とたずねると

「いや、料理は私が…」

とさつきよりもさらに顔を真っ赤にしながら小声でこたえた。

ううゝ 可愛いゝ

いつもあんなに強気なのにこういう時だけこんな態度をとるのは
反則だと思うのは俺だけか？

「じゃあ帰りに材料買いに行こぜ。
とびきりうまい料理作ってくれよな。」

と照れを必死に隠しながら俺は彼女の手をにぎりしめ歩きだした。

いや、良いものを見せてもらったよな

…ん??

俺が誰かって??

出てきてたたる電話の時に……そうそう、あの時の

おもしろそうなことが見られると思ってつけてみたんだよ

あいつには内緒で頼むよ

いやマジで…ばれたら殺されそうだしな…アハハ

(後書き)

どうだったでしょうか？

前の方が良かったとか

まあ今回の方がちょっとはマシになったよとか
相変わらずダメダメですねとか
とにかく感想等待着てます

まだまだ色々手探り状態の自分ですが温かい目をお願いしますm
――) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7889d/>

今日は何の日??

2010年12月14日21時06分発行